

■随想

ムーミン鬼とミイの尻尾

松村一登 (高23回)

ムーミン、ノキア、キシリトール

フィンランドの文物で、日本でもっとも知られたものを、独断と偏見で三つあげるなら、ムーミン、ノキア、キシリトールだろう。

ノキアは、首都ヘルシンキ(注1)から鉄道で一時間半(速い列車)〜二時間(遅い列車)ほど北へ行ったところにあるフィンランド第三の都市、タンペレの西隣にある人口三万人ほどの小さな町の名前で、ここが企業グループ・ノキアの発祥の地である。

甘味料のキシリトールは、インターネット上の百科事典「ウィキペディア」によると、シラカバの木から取れるキシロースというものから合成されるらしい。

フィンランドでは、日本で登場するかなり以前から食品添加物として使われていて、1980年代の終わりに



●まつむら・かずと
豊丘村出身。東京大学文学部卒業。現在、同大学大学院人文社会系研究科教授。専攻は言語学で、ウラル諸語の文法研究が専門。今年2月、エストニア共和国大統領からテラ・マリアナ十字勲章第四等を授与された。

二年ほどフィンランドに住んだ私は、キシリトール入りのガムを毎日のように嘸んでいた記憶がある。

ムーミンは何者か？

ノキアとキシリトールは、見たり触ったりできる実在のものだから、日本人でも間違えることはまずないだろうが、スウェーデン語系フィンランド人の作家トーベ・ヤンソン(1914〜2001)の書いた物語の主人公ムーミン(本名はムーミン・トロール)は、いったい何者なのか、正体がつかみにくい。

トーベ・ヤンソンの創作したキャラクターであるムーミンの姿は、彼女の描いた挿絵や、後に作られたアニメ、各種ムーミングッズなどを手掛かりに思い描くしかないわけだが、インターネットの「ムーミン公式サイト」注2で見ればすぐにわかるように、原作の挿絵とアニメ

とでは、主人公ムーミンの姿がかなり違う。アニメのムーミンと比べると、原作のムーミンは痩せていて、しかも陰気な印象を与える。よく知られているのは、アニメの牧歌的なムーミンのほうで、ムーミン・グッツもアニメのほうの姿を元にして作られている。

ムーミンはその姿形からして、人間ではない。前出の「ウイキペディア」では、「妖精のような生物」とされている。インターネットで見ると、日本では、この「ムーミン」妖精」説の支持者が圧倒的に多いようである。

妖精、トント、トロール

フィンランドには、空想上の生物体が何種類かいることになっているが、主なものは、妖精、トント、それにトロールの三つである。

いずれも空想の生物体だから、その姿形は人々の心の中にしかないわけだが、私の調べたところによれば、フィンランドの妖精、トント、トロールには、それぞれ異なる外見上のはっきりとした特徴があるとされている。

	妖精	トント	トロール
羽根が生えている	○	×	×
尻尾がある	×	×	○

羽根の有無と尻尾の有無に注目するだけで、誰でも簡単に見分けられるので、覚えておくくと便利である。

私と同年代のある日本人女性が、ムーミンは森のトントだと主張していた。理由を聞くと、癒し系だからだそう。思わず納得してしまいそんな興味深い説ではあるが、ムーミンは尻尾があり、人間の恰好もしていないので、およそトントらしくなく、「ムーミン」トント」説には最初から無理なところがある。

日本でもっとも強く支持されている（と思われる）「ムーミン」妖精」説にも、致命的な弱点がある。ムーミンは背中に羽根が生えておらず、尻尾があるという、およそ妖精らしからぬ姿をしていることだ。

ムーミンは本当は「怖い」トロール

ムーミンがトントでも妖精でもない決定的な根拠なら、「ムーミン・トロール」というムーミンの本名にはっきりと示されている。ムーミン自身が、自分はトロールだと言っているのだから、ムーミンはトロールであって、妖精やトントであるはずがないではないか。

フィンランドの権威ある辞書を引いてみると、トロールは体毛が濃く、尻尾があり、山岳地帯に住む恐ろしい（想像上の）生物体だということが書いてある。



図1

『ムーミンパパの思い出』より。尻尾に注目

み分けを行なっている。ムーミン谷で人間の姿を見かけないわけだ。

私の友人で、日本語を勉強したことのあるフィンランド人は、トロールは日本の鬼に相当するという。

ムーミンは原作の挿絵では、陰気で怖い雰囲気をもっている、アニメで普及した「癒し系」のイメージとはかなり違う。

アニメのムーミンが一般化してしまった現在、どちらが本当のムーミンなのかを議論しても、大して意味はないかも知れないが、トロールが一般に怖い存在だと思わ

子どもたちは普通、トロールに親しみを感じるよりは恐がる。人間と共生しているトントと違って、トロールは人間の住まないところに住んで、人間と棲

れていることからすると、癒し系のムーミンはあまり典型的なトロールとは言えない。

また、絵本に出てくるトロールは、毛深くて人間によく似た姿をしているので、河馬によく似たムーミンは、この意味でもあまりトロールらしくない。トント説や妖精説が生まれるのもわからなくもない。

ムーミンの物語の登場人物(？)の中で、私は、によるのが結構好きで、フィンランドで買ったたによるの携帯ストラップを愛用している。ムーミン家に同居し、シニカルな言動をする女の子(？)として、アニメではレギュラー出演するミイも、私の好きな脇役のひとつである。

彼女は、ムーミン一族とは異なる種族に属し、アニメではかなり大きく描かれているが、身長十五センチくらいで成長が止まってしまったことになっている。

ミイには、尻尾がある？

ムーミンに関する詳しい話は、日本でたくさん出ている翻訳本、解説本に委ねることにして、最後にとっておきの話をひとつ。

日本では、『ムーミンパパの思い出』(講談社文庫)として翻訳が出ているムーミン原作本の挿絵には、ミイや

図2



尻尾が描かれているほうがつじつまが合うこと
はみなさんおわ
かりの通りであ
る。しかし、挿
絵の原画は、印
刷された挿絵に
先立つものは
ずだから、原画
のミイのほうに
尻尾がないとい

ミイの一族に尻尾が描かれているものがあることをご存知だろうか(図1と図2)。同じ本の英訳やロシア語訳、さらには日本語訳の挿絵でも同じである。

ムーミン原作本の他の巻の挿絵を見直したが、どうやら、ミイの尻尾は『ムーミンパの思い出』だけの現象と思われる。さらに不思議なことに、何年か前、タンペレの「ムーミン谷」博物館(注3)で開かれたムーミン原作本の挿絵展で見た原画では、ミイの一族に尻尾がない(図3)。

ミイがムーミンと同じくトロールの仲間だとすれば、

図3

Muumipaperon urotyöt, 1950,
tussi paperille, 13,5 x 15 *



「ムーミン谷」博物館の特別展示のカタログより。図1の原画とされるが、尻尾がない

うのは、奇妙な
気がする。もし、
校正の段階で尻
尾を書き加えた
とすると、それ
は著者以外には
できなかつたと
思われるが、尻
尾を消すことな
ら、編集者にも
出来そうだから
である。

ひよつとすると、原画展に展示された絵とは別に、今では失われた別の原画があったのかも知れない。

(注1) ヨーロッパへの最短ルートのひとつとして人気のフィンランド航空のヘルシンキ直行便の運行が始まったのは、確か1983年。日本を午前中に発ち、その日の夕方にヨーロッパに着く直行便には、成田空港発のほかに、関西空港発、中部空港発もあって、ヘルシンキは今や日本人にいちばん身近なヨーロッパの町となっている。

(注2) <http://www.moomin.co.jp/gallery/>
(注3) <http://www.interStampere.fi/mummitakso/tampere/>
博物館のホームページには、日本語のページもある。

筆者のフィンランド関連ホームページ：<http://www.kmatsumi.info/suomi/>
筆者のフィンランド関係ブログ：<http://spsik.cocolog-nifty.com/suomi/>